

彦根城表御殿と能舞台

城砦としてだけでなく住居でもあったヨーロッパの中世の城の一般的な印象とは対照的に、日本の城の大名は通常、本丸とは別の豪華な区画に住んでいた。この建物は、城の御殿（大名の住居の意）と呼ばれている。16世紀半ば以来、御殿は藩主の住居と公的業務が行われる政庁としての二重の役目を果たしていた。これらの2つの役目は、「裏」である（奥）の居住区と「前」の（表）の仕事の場という2つの領域に明確に分けられていた。彦根城の御殿は約30棟の建物で構成され、1615年から1622年の間に建てられた。その間、藩主の井伊直孝（1590～1659）は本丸の別の区画に住んでいた。

彦根城御殿は19世紀後半に取り壊されたが、1980年代に跡地が発掘され、建物は彦根城博物館として再建された。建物の展示スペースと保存庫は鉄筋コンクリートを使用して再構築されたが、居住区と外装は伝統的な木材接合技術と当時の材料を使用して復元された。

表御殿の能舞台

藩主が訪問者や他の武士と会うとき、藩主は表御殿で面会した。表御殿にはこれらの会議を行うための多くの茶室があった。彦根城の表御殿には、重要な客人を迎える時や、大名をおもてなしするときに使用できる能舞台があった。美術館の中央にある能舞台は、能を愛し、自らのために能役者まで雇っていたという井伊直中（1766-1831）によって1800年に建てられた。この舞台は、大名の住居内に備えられた唯一の現存する能舞台である。19世紀後半に御殿が取り壊された後、何度も再配置され、1987年に最終的に復元された建物の元の場所に戻された。この能舞台は今もなお定期的に使用されている。